



月見橋

# かけはし

第176号  
2021年10・11月号

発行：峡南教育事務所  
地域教育支援スタッフ

南巨摩郡富士川町鵜沢771-2  
TEL:0556-22-8154  
FAX:0556-22-8144  
HPでも御覧になれます。  
<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.html>



月見橋を覗く富士山は  
新富嶽百景に選ばれて  
います

### 目次:

- 峡南地域人権講演会 1  
ビデオ公開
- 峡南地域子育て学習会 1  
開催
- 第61回関東甲信越静公民館 1  
研究大会山梨大会  
全体会オンデマンド配信
- スクールガードリーダー 2  
育成講習会
- わかば支援学校ふじかわ 2・3  
分校 防犯訓練
- 市川・青洲高音楽部 3  
峡南地区中学校と交流  
(市川南中学校)
- 上流研(早川子どもクラブ) 4  
早川エコファーム  
枝豆収穫祭



今期は、さまざまな場所で「地域の誇り」ということばを耳にしました。中部横断道が開通し、観光客も徐々に戻り、県内も賑わってきたので地域のよさを見つめ直すのによいきっかけとなりました。

## 地推協・峡南教育事務所主催 峡南地域人権講演会 ビデオ公開

講師に

作家江宮隆之氏を

江宮氏



「愛は国境を越えて」はビデオ配信となり、九月二日に南巨摩合同庁舎会議室で撮影しました。

江宮氏よりメッセージ  
「他文化共生」を

考える参考に

作家の江宮氏は、幅広い語彙を使用し、併合時代の韓国で、現地の人のために一生をかけた三人を感情豊かに紹介しました。思いがこみ上げ、途中声を詰まらせる場面もありました。彼らの人生に思いを馳せることが人権を学ぶことにつながります。ぜひ峡南教育事務所のホームページよりビデオをご視聴ください。また、号外は講演会の内容を

まとめたいレポートとなつていきますので、合わせてお読みください。

過去に講演をCATVで流して貰った経験はありますが、ビデオで撮影する形の講演は初体験でした。普通の講演は初体験でした。普通に通に話しているつもりですが、視聴して「困ったな」と思いました。内容が十分に理解して貰えるかな、という不安もです。とはいえ、既に講演のビデオは流れています。中身だけに着目してください。ここで私が語った三人の日本人の生き方は、きっと「他文化共生」を考える上で参考になると思うからです。

## 第61回関東甲信越静公民館 研究大会山梨大会 全体会オンデマンド配信

十月二十九日に山梨で開催予定だった関東甲信越静公民館研究大会は、感染症拡大防止のため、YouTube配信となりました。

その内容は、窪田包久(かねひさ)実行委員長の挨拶後、菅本正治氏(山梨県出身、現在は長野県立歴史館特別館長の基調講演「歴史を踏まえた地域作り」となっています。菅本氏は最初に公民館とは何かを説明し、学習拠点として公民館を利用した地域の活性化を提案しま

す。町おこしは、歴史を知ることから始まり、大切なのは地域独特な自分たちだけの地域作りで、地域に誇りをもつことだと言います。自分たちがよいと思うことから始まるのです。

次に山梨県の事例発表として甲斐市敷島公民館の地域に伝わる人物や歴史を劇やミュージカルで紹介する公民館祭りの様子が発表されます。演じているのは一般公募の市民とは思えないほど完成度が高いものでした。「関プロ公民館山梨大会」で検索できますのでご視聴下さい。

### 今号の1枚は

一瀬 清 指導主事です。



歩行者優先!!

旭町ちびっこ広場で、ホームラン予告  
……ではなく、交通安全予告です◎

### 峡南地域 子育て学習会



「子どもの心に寄り添って」  
～幼児期・学童期の子育て～

講師：川邊 修作 氏

11月18日(木)実施

次号で詳しい内容をお知らせします。





# スクールガードリーダー育成講習会



**地域の子どもは地域を守る**  
 県警生活安全部の阿部達也さんからは、子どもたちの安全を守るための講話がありました。コロナ禍で外出が減ったことで不審者事案に変化が見られることや、マスクをしているので不審者がわかりづらいうこと、子どもが思う不審者（黒ずくめ、髭、サンングラス、マスク、帽子）と実際の不審者（スーツ姿や女性もいる）が違うこと、声かけやつきまといは躊躇せずに一〇番することなどの説明を受けました。次に、南部町教育委員会の佐野裕さんが、南部町内の学校安全対策について学校・家庭・地域・各種団体と連携し児童生徒の安全確保に努めていると発表しました。



七月十六日（金）総合教育センターで、スクールガードリーダー育成講習会が開催され、県内市町村の学校安全担当者としてスクールガードリーダー、各警察署に配属されている警察OBのスクールサポーターが出席し、児童生徒の安全を守るために事業説明や講話、実践発表、情報交換会が行われました。

七月十六日（金）総合教育センターで、スクールガードリーダー育成講習会が開催され、県内市町村の学校安全担当者としてスクールガードリーダー、各警察署に配属されている警察OBのスクールサポーターが出席し、児童生徒の安全を守るために事業説明や講話、実践発表、情報交換会が行われました。

## 班別情報交換会

休憩後五十分間、六班に分かれて「地域の見守り活動全般について」「通学路の交通安全について」情報を交換しました。

## 鵜沢署スクールサポーター班



鵜沢署のスクールサポーター横内久岳さんは管内の教育機関をくまなく巡回し、行政の人や保護者とも顔見知りになり、横のつながりを大切にしていると話しました。子どもも横内さんを知っていて、近くを通ると声をかけてくるそうです。

## 南部署スクールサポーター班



南部署のスクールサポーター小泉公司さんは「通学路で危ない道がある」という意見を受けて「警察署は地域の為にやってくれるので、相談してみたらどうか」という警察OBならではの助言をしました。

## 班ごとのまとめ発表 今後の課題

六月の千葉県での痛ましい交通事故から、参加者全員が子どもの安全をより真剣に考えており、地域に子どもが守られていることを実感できる会でした。

**今後の課題**

- 子どもの見守りボランティアの高齢化→後継者の確保が難しい
- 人口増加やナビの普及による交通事情の変化→渋滞回避のために狭い道を抜け道とする車の増加による危険

ふじかわ分校では、十月二〇日（水）午後二時より、防犯訓練を行いました。緊急事態に備えその対応と連携、非常通報システムの使用方法の確認が目的です。昨年度末に設置された通報ボタンを見て、今年度の荒川昌浩校長が提案し児童生徒を守るため鵜沢警察署の協力で実現しました。非常通報ボタンは職員室に二カ所あり、押せば一〇番に通じ、警察からの逆信電話に答えるようになっていきます。緊急時で慌てているときに素早く連絡できるシステムです。最初に、ホールに集合し、警察官六名と非常通報装置業者の紹介や挨拶があり、それぞれの役割（児童生徒を守る、通報するなど）を果たすことや、訪問者全員が不審者ではないので、見極めも必要であることが伝えられました。

## 訓練内容

混乱を防ぐため、児童生徒帰宅後、先生が子ども役と先生と子ども（以下、先生と子ども）に分かれて行役の警官から「教室に逃げ込もうとしたが鍵がかかっていたの、横内スクールサポーター来て、先生に何か尋ねました。先生は事務室に案内しよう」と通らずに来た人には用心すること。犯人を取り逃がして助けがないことの方が大切」と助けました。通報を受けた谷戸聡子副校長

**わかば支援学校ふじかわ分校 不審者対応 防犯訓練**



かけました。不審者は廊下に出てナイフを振りかざしながら大騒ぎしましたが男性教員二人が刺股で立ち向かったので、校舎外に逃走しました。訓練でしたが、迫力があり恐怖を感じるものでした。その間にパトカーが到着し、警察官が状況確認と似顔絵の作成を行いました。



がボタンを押し逆信電話に應對しました。先生達が子どもを教室に誘導し、不審者の侵入を防ぐために鍵を

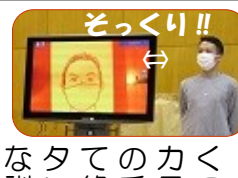


不審者↓ 追い詰める先生達

## ホールに集合して「振り返り」

先生達から「不審者は声をかけてきた時は穏やかだったが豹変した」「けが人の対応や事件の周知方法は？」（大声を上げて知らせるなどが出され、不審者役の警官から「教室に逃げ込もうとしたが鍵がかかっていたの、横内スクールサポーター来て、先生に何か尋ねました。先生は事務室に案内しよう」と通らずに来た人には用心すること。犯人を取り逃がして助けがないことの方が大切」と助けました。通報を受けた谷戸聡子副校長





(二面から続く)作成した似顔絵が公開され、よく似ていたので会場からはどよめきがありました。捜査官から「怪しいと思ったらほくろ、歯並び、傷、入れ墨など本人がすぐに変えられない特徴を覚えておくこと」と教えてもらい、カラーボール投球練習(犯人の手前地面をめがける)をして終了しました。実際にポタンを使ったことで実用的な訓練となりました。

### 地域との連携で子どもを守る

ふじかわ分校では、施設徹底、防犯カメラ設置などの対策をしていますが児童生徒は、地元警察(五開駐在所・鯉沢警察署)との連携やスクールサポーターの定期的な見回りによっても守られています。また、コロナ禍で交流ができません。地域で気にかけてもらっていることも防犯につながっています。対面行事はコロナ禍でできませんでしたが、集団の学びや社会性を育てるためにも効果的なので、徐々に再開する予定だそうです。

昨日できなかったことができるようになる、子供の成長の瞬間という奇跡に立ち会えることが支援学校の醍醐味、このことです。明るく前向きな先生達と温かい地域に支えられ、豊かな自然環境にびっぴりりのチャイム(ベーターペン作曲『田園』)の音色が響き渡る中、子ども達は伸び伸び生活しています。

**市川・青洲高校音楽部**  
×  
**峡南地区中学校**  
**合唱で交流**  
(市川南中学校)

市川高校音楽部と峡南地区中学校との交流は以前から行われていたが、平成二三年より現在の形になりました。感染症拡大防止のため、思うように合唱練習することは難しくなっていました。今年度は市川高校三年生と青洲高校一・二年生の部員が中学校を訪問しました。その中で市川南での交流を紹介します。



市川南中は小規模校で職員も生徒も一緒に合唱を作ることなどを話しました。  
**全員で作る市川南中の舞台**  
合唱はマスク着用で行われ、学年合唱の前には歌に



薬袋直哉先生

生の舞台を見て目標に頑張ったり、高校生の所作に影響を受け、「卒業生にできるならば自分も」と、先輩という身近で目指しやすい手本を追うからだと思います。

### 中学生に気付かされた!!

実は、薬袋先生も中学生に影響を受けたことがあります。それは入賞を意識しすぎていた頃のことです。生徒は失敗や怒られることを恐れおどおどして先生自身もコンクールの駆け引きに疲れ合唱が好きではなくなっていました。そんな時の交流行事で、無心に歌っている中学生の姿に涙が止まらなくなったことがあったそうです。その演奏は「やりたくない、やらされている」というような気持ちの隙がなく、足りないものに気づかせてくれました。それまでは、先生の理想を生徒が表現しようとするスタイルでしたが、その日を境に、生徒が音楽を感受するのを意識するスタイルに変わりました。生徒と先生と一緒に音楽を作り上げることで、全ての生徒が自分の音楽として演奏するようになり、先生も生徒も音楽を共有し、信頼し合うようになりました。「生徒が本来持っている力に気付かされた。これまでは、自分が引っ張っていかないとダメだという感じ。それだと嫌になる時、限界がくる」

### 一人で勝手に思いつく独りよがりな

これは薬袋先生が経験から学んだ言葉です。合唱交流をただの思い出にせず、多様性を認め多面的に物事を捉えられる経験として、人生に影響を与えるきっかけにして欲しいという思いがあります。

### スローガン「響かせよう、みんなの歌声を未来へ」と

七月八日(木)に音楽部員と顧問の薬袋直哉先生が中学生の合唱を指導し、二〇日(火)に発表会を行いました。実行委員長が「今まで一番よい合唱となるようにしましろう」と挨拶し、丹沢伸也校長は、自身が市川高出身で、市川高校の音楽部の実績の高さや、小林智校長とクラスメートだったこと、

### 交流で成長する峡南地区の中学生

薬袋先生は、交流の効果を感じています。それは、一、二年生が三年



NPO法人日本上流文化圏研究所(早川子どもクラブ)  
早川エコファーム

# 早川大豆 枝豆収穫祭

十月二三日(土)に早川町早川集落で、早川大豆の枝豆収穫イベントが行われました。これは「第三回三里地区早川集落伝統の味噌造り復活祭」の中の一つで、味噌造りの前に枝豆を収穫し味見する行事です。昔は地域全体で、味噌にするための大豆をかぶら桶(巨大な木桶)に入れ、石窯を炊き、夜通し蒸しました。そして住民は次の日の朝から一斉に味噌造りを始めました。それは祭りのように楽しい行事でしたが、いつからか途絶えてしまいその伝統を復活させようと様々な人が立ち上がった実現しました。

## 清々しい天気の中、作業開始!!

日本上流文化圏研究所(上流研)が開催している「早川子どもクラブ」では、早川エコファームの協力の下、この行事に参加し、朝九時より、子ども達は秋の収穫、芋掘りを始めました。エコファームの小河原孝恵(ゆきえ)さんが最初に手本を見せてくれました。雑草や乾燥の防止のために土に敷いてある黒マルチ(トウモロコシ由来で土に還るもの)をよけ、つるをたぐり寄せ、土の中で縦ツマイモを優し



く揺すらずに引き抜きます。子ども達は二人一組で、長さすぎるつるをカマで切ったり、畑の中のナメクジを発見したり、一度にたくさん芋を引き抜いたり、逆に芋が折れてしまったりとさまざまな体験をしました。



## 枝豆を収穫、秋の味覚を味わう

休憩後、参加者は自己紹介をして、その後枝豆を枝から外す作業と、収穫したサツマイモ(紅はるか)をアルミホイルで包む作業をしました。薪でおこした火で枝豆がゆで上がり、会場は温かい蒸気とよい香りに包まれ、参加者は丸々として甘みのある豆に舌鼓を打ちました。



## 「地域の持つかさよさをみんなで感じていこう」

上流研は「山の暮らしを守る」として、所長の上原佑貴さんは、歳時記のように一年一年を続けていくのが目標だと言います。最近の時の流れは一方通行で、過ぎてしまえば終わったものとなっ

ているように感じるからです。本来は、田植え・稲刈り・わらの利用から田植えへ、または種まき・枝豆収穫・大豆収穫・豆腐作り・味噌造り、そして豆まきへというようにそれぞれ作業は次に続き、そしてまた始めの作業に戻ります。水が木を育て、落ち葉が土となり、その土がきれいな水を生み出すようにあらゆるものは循環していて、その循環が地域を活性化していきます。そこで根付いていくものが文化だと上原さんは感じるようになります。

上流研としてもさまざまな地域おこしに携わってきましたが中でも大豆を蒸す石釜修復を手がけたことが、上原さんにとって忘れられない体験となったそうです。地元の人々が先陣を切って桶を操り完成時に人々が高揚しているのを見て、伝統の石窯が蘇った風景が与える活力を体感しました。これが上原さんの思う未来に残していきたい地域文化であり、みんなを感じていきたい地域の持つかさよさです。



朝早くから↑薪で窯の準備

みんなで枝から枝豆をはずします→

上原さん↓



## 地場野菜の危機を救え!!

エコファームは「人と自然が共生する地域作り」を目指しています。現在早川町では高齢化が進み、農家の後継者がいないという課題があります。そのため、茂倉(もぐら)つり(茂倉集落の在来種のキュウリ、普通のキュウリより太くピークは七・八月のみや西山いんげん(西山集落の在来種、熟すと赤

くなり乾燥させると豆がまだら模様になる)のようなその風土でしか育たない地場野菜が絶えてしまう危機がありました。そこで、エコファームの人々は地場野菜の栽培を継続させようと試みました。鹿に実を食べられてしまったこともありましたが取っておいた種を使って野菜を育てることに成功しました。この試みは最終的に販売できることと、継承していくことを目指しています。村松さんにとって、仲間これらの地場野菜を救ったのは、とても嬉しく心に刻まれた経験となりました。

## 農業体験受付中

農業体験は随時受け付けていますので、興味のある方は参加してみてください。地域、伝統、文化など体で感じる事ができる素敵な体験です。エコファームのホームページやフェイスブックにも掲載されています。